廣津和郎全集

広津和郎全集　第一巻
定価三五〇〇円
昭和四十八年十二月十日印刷
昭和四十八年十二月二十日発行
著者　広津和郎
発行者　高梨茂
印刷者　山元正宜
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

広津和郎全集　第一巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

雪の夜　一一
珈琲　一三
かえり路　一六
不安　二〇
お志摩　二四
暗い壁　二八
病める姉と優しき弟　三一
其日の印象　三四
眼の印象　三六
平凡な死　三九

町の出水　四三
小胆女　四七
汽車の音　四九
梅雨晴　五四
若葉の香　五七
出獄の前夜　六〇
創立記念日　六三
破れ風船　六六
少年の夢　六九
朝の影　七三
朝　七六
ある夜　一〇三

神経病時代　一〇四
本村町の家　一五四
崖　一六八
師崎行　一七三
静かな春　一八七
清水港の午後　一九六
線路　二〇三
やもり　二〇六
小さな残虐　二二七
ある馬の話　二三三
金魚　二三九
波の上　二四三

横田の恋　二六二
死児を抱いて　二八二
お光　三二九
猟犬　三六四
針　三七〇
水溜　三九六
父と子　四〇〇
叩く鹿　四一五
神風連　四二三
呉宗援　四三八
遊戯場　四四九
隠れ家　四五六

生き残れる者　四八
小さい自転車　四一
あとがき

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

小説　一

雪の夜

三田の叔父さんの病気が危篤と聞いて、驚いて家を出たのは午後の五時頃。朝の中から薄墨を流したような空は、ついつい今し方になって雪をちらちら落して来たと同時に、寒い寒い北風をさえ伴のうて来て、コートの上に肩掛をかけて、更にその上に頭巾を冠って居ても、身躰は血すらも氷結ってしまいそう。

恁んな日には急用の外、戸外に出る人もないと見えて、電車の中は至って空いてる。風呂敷包を脊負った汚しい老婆と、鳥打帽を眉深に冠った軍人風の男と、それに妾を加えて唯の三人限り、そして各自余程間を隔てゝ座して居るので、空隙の多い車内の空気は、中々温まりそうもない。

それでも電車が日比谷公園に来た時には、大分乗客があったので、少からず混雑した。妾は叔父さんの事を考えてる。一躰危篤と言って如何程御悪いのだろう——叔父さんは幼さい時から能く妾を可愛がって下さった。そして先日と言ってもつい十日ばかり前に御眼に懸った時までは、あれほど御健全な顔をしてらっしたのに、それが急に危篤とは夢のようだ。

「お時さんじゃないの？」と此の時不意に妾の名を呼ぶ者があるので、顔を上げると、叔父さんの一人息子の峰さんが何時の間にやら、妾の前に腰を下して居る。峰さんは親類中一番の道楽息子という評判の人なので、常に余り口を聞いた事は無いが、此の時ばかりは然うもならず、

「おや峰さんなの、して叔父さんの御容態は如何ですの。」

と言うと、峰さんはさも驚いたという風をして、

「エッ父が病気？　何時からですか。」

妾もそんな事であろう、何処か遊びの帰路でもあろうと思ったが、素知らぬ顔をして、

「おや、未だ御存知ないの、妾も未だ能くは知らないんですけれど、先刻電報が参りましたものですから——。」

「それでは之から自宅に御出で下さる所だったのですか。」

と案外平気な顔をして、

「それでも何に、大した事は無いんでしょう！」と、独語。

「いえ、御危篤なんですって！」

「エッ、父が危篤？」と少しは顔色を変えたが、心から心配するような様子は些ともなく、「それじゃ帰宅にゃなるまい

かなあ。」
「峰さんは何ですの、之から何処へ御出掛けの所だったのですか。」と妾も余りの事と思ったので恁う言うと、
「いえ、なに、些っとその品川に友人が待ってますのでね。それに又少々用向もありますから。」と稍狼狽気味で答えたが、「別に行く必要も無いんです。」と附加える。その態度が自分でも幾らか妙と考えたらしく、妾の方を向いて照れ隠しに「エヘ、、、、、。」と薄っ片な笑い方をした。妾も不快を感じたのでそのまゝ黙ってしまった。
雪は益々降る。風は愈々吹く。車外の寒さの烈しい事は、窓の硝子の内側に、人々の呼吸が白く氷結くのでも知れる。峰さんはと見ると、深く何か考えてるらしく俯向いて居て、時々歎息をさえ吐くが、妾の眼にはどうもそれが、現在危篤である自分の父の上を悲しんでるものとは見えぬ。只妾の前で心の奥底を見極められたくないと言う、一種の虚栄を張って居るのに過ぎぬ。妾は峰さんの心が寧ろ憫れになってしまった。
電車は四国町で停まった。妾は峰さんと共に降りた。妾の小さな雨傘の中に妾と峰さんは一所に這入ったがその時まで悲しそうな顔して居た峰さんは、急かに勢い付いた調子になって、それでも何も言う事が無いものだから、解り切ってるのに、
「でも父はそれ程烈くはないでしょうねえ。」と聞く。それは真に親を思う子の心からならば、出もしようが、否出るのが自然だが、今の峰さんの心に恁んな思いがあろう筈がない。
ヒューと電信線に音を立てるような風が吹くと、
「おゝ寒い。」と云いながら、故意か偶然か峰さんはひたと妾の方へ寄り沿うて来る。妾は、
「男は悲哀を感ぜぬものかしら。」と思った。
他から見ると楽くも見えよう此のもやい傘の中には、父の危篤を悲しまずに女に寄り沿うとする男と、その男の心を憫れんで不快を感ずる女とが、思い思いな想像を走らせながら這入って行く。
雪の夜の寂寞は只訳もなく妾の心を襲うて来た。

珈　琲

争っている中に、何のために争い始めたのだったか、純吉にも、なつ子にも、解らなくなってしまいました。それは何でも非常につまらない事からだったのです。

「お前は直ぐ口答えをする。はい、と云えばいいのだ。女と云うものは、へんに負け惜しみが強くて、素直に『はい』と云う事が出来ないものだ。直きに他の事を云い出す。今の問題は今の問題だけでいいのだ。それを他の事がどうだとかこうだとか云い出す必要はないのだ。……えッ、面倒臭い。俺はお前のような女に理窟を云い聞かせるのは、もう面倒臭くて我慢がならない……」

純吉は未だやっと二十七でした。血色の好い、頬が子供らしく少しむっくりと膨れていて、何となく未だ坊っちゃん坊っちゃんした気分が抜け切らない顔をしていました。若し彼がその鼻下に、短く刈り込んだ、俗に云うあのチャップリン髭を生やしていなかったなら、誰も彼を二十五以上の年をしている男だと思うものはないでしょう。——今は併し彼は細君と云い争っている場合です。ですから、眉の間に寄せた皺が、彼の顔を、いつもよりも幾分か老けて見せていました。

なつ子は、縁側に半分はみ出すような恰好をして、畳と敷居との両方にまたがって坐っていました。彼女は二十一です。彼女は髪を、近頃流行の、あの前を分けて、後にくるくると丸めてやどかりの貝殻のように突き出した恰好に結っていましたが、その細面の顔に並んでいる眉や眼には、未だ子供の色が失せていませんでした。ひと口に云うと、つまり女学生風の感じが未だ抜けていませんでした。彼女は泣いているのです。ほんとうに、ほんとうに悲しそうな顔をして。——若し彼女のその泣顔だけを見たならば、人人は彼女が一体どんなに悲しい事にぶつかっているのかと、驚きの眼を瞠るでしょう。彼女がその両親にでも死別れたのか知ら、そんな想像までを浮べるでしょう。それ程彼女は悲しげな、そしてそれと同時に口惜しげな顔をして、派手な浴衣の袂で、眼を蔽うているのです。

それは夏の事でした。昼の暑さが去って、庭にはもう夕風が、涼しく渡っていました。東京の山の手の、それ程大きくも広くもないが、併し此若い夫婦者を入れるには十分な、小

綺麗な家であり、又庭でありました。七坪か八坪の庭でも、植えてある木などは、かなり枝ぶり面白く、なかなか凝ったものでした。——丁度その木の一本の、曲りくねった松の木に、その時油蟬が一疋何処からか飛んで来て、ジジーと云う焼きつけるような、けたたましい啼声を立てましたが、直ぐ何に驚いたか、じっと云って、そして直ぐ又何処かへ飛んで行ってしまいました。その後は、山の手の静けさが、その辺一帯を領しました。

純吉は腕を拱いて、むっとした顔をしていましたが、その時また口を開きました。

「ほんとうに、俺にはもう我慢がならん。お前見たような分らずやがあるものか。——ああ、ひとりでいた時の方が、どんなによかったか……」

「それなら、おひとりにおなり遊ばしたら宜しゅうございますわ」となつ子は、袂を眼から放して、そしてきっとした眼をして、空うそぶきました。

「何だと?」

「……」

二人はしばらく睨み合っていましたが、

「よし、それなら俺は佐山のところに行って来る。今の言葉をよく覚えているがいいぞ。——おい、著物を出して呉れ」

「あなたが勝手にいらっしゃるんですから、御自分で勝手にお出し遊ばせ」

「よし、自分で出して来る」

そう云って、純吉は荒荒しく茶の間の方へ、足音を立てながら行ってしまいました。

佐山と云うのは、此若い二人をめあわした仲人でした。

茶の間では、わざと乱暴に開ける簞笥の音が、やかましく聞えました。そして又、力まかせに抽斗を閉じた音が聞えました。なつ子はその間、少しも姿勢を崩さずに、黙っていました。

やがて、純吉は羽織の紐のカンをつけながら、再び荒荒しい足音を立てて、彼の書斎兼座敷に戻って来ました。そして突っ伏しているなつ子の頭の上から、

「それじゃ、行って来るぞ」そう云いました。

「……」なつ子は黙っていました。

「それじゃ行って来るぞ」と若い良人は又繰返しましたが、今度の言葉の語尾は、少し未練らしく、力が抜けているような感じがしました。彼は自分でそれに気がついて、そして自分で自分に腹を立てたのです。なつ子に対して、弱味を見せてなるものか、そう思ったのです。——そう思った反動から、彼は勢の好い調子で、ずかずかと玄関に出て行きました。

なつ子は顔を上げて、その後姿を見ていました。が、良人が帽子を手に取り、玄関に下り、それから格子戸に手をかけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com